

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：23302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26670926

研究課題名(和文)看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴と変化

研究課題名(英文)Characteristics and changes of communication skills of nursing students

研究代表者

武山 雅志 (TAKEYAMA, MASASHI)

石川県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：50381695

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では看護学生のコミュニケーションスキルの特徴を明らかにするため看護学生と他分野専攻学生、中堅看護師を比較した。その結果、看護学生は「相手を傷つけない」という気持ちが「相手の考えや気持ちを正しく読み取る」や「相手を受け入れる」というコミュニケーションスキルと関係していることが明らかとなった。

2年次から4年次までの3年間のコミュニケーションスキルの変化を明らかにするために、質問紙調査とグループインタビューを実施した。その結果、臨地実習場面への慣れや他者の接し方を見ることを通じて解読力、自己主張、表現力の有意な変化が認められた。しかし特定の場面で自己表現に戸惑いを感じる学生も見られた。

研究成果の概要(英文)： In this research, in order to clarify the characteristics of nursing students' communication skills, we compared nursing students with other field major students and middle-sized nurses. As a result, the nursing student became clear that the feeling that "I do not want to hurt others" is related to the communication skill of "correctly reading the idea and feelings of the other person" and the communication skill of "accepting the other party". We conducted questionnaire surveys and group interviews to clarify changes in communication skills during the 3 years from 2nd to 4th. As a result, significant changes in deciphering ability, assertiveness, expressivity were recognized through accustoming to the clinical practice scene and looking at other people's contacts. However, there were some students who felt confused about self expression in particular scenes.

研究分野：臨床心理学

キーワード：コミュニケーション・スキル 看護学生 傷つけ回避 自己表現

## 1. 研究開始当初の背景

看護技術を習得する前提としてコミュニケーション・スキルの重要性が盛んに語られてきた。最近ではより実践的なコミュニケーション教育として模擬患者を用いた試みが盛んに行われおり、その有効性が示されている(荒谷他、2010;鈴木、2004)。しかしながらそこには看護学生のコミュニケーション・スキルが現時点でどのような特徴を有するものであり、それをどのように変化させたいのかが不明瞭なものであった。その原因の一つにはコミュニケーション・スキルをどのように定義づけるのかという問題がある。コミュニケーション・スキル尺度にはさまざまなものがあり、その数と同じだけ定義があるという状態であった。それを統合しようという試みによって出来上がったのが ENDCOREs 尺度である(藤本・大坊 2007)。ENDCOREs 尺度は自己統制、表現力、解読力、自己主張、他者受容、関係調整といった下位スキルから構成されている。これを用いることによって従来バラバラに定義づけられたコミュニケーション・スキルが包括され比較可能性が高まることが期待できる。また従来行われてこなかった看護学生と他大学の学生および中堅看護師それぞれのコミュニケーション・スキルを比較することができるようになり、看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴を明らかにすることができる。また看護学生のコミュニケーション・スキルの学年ごとの変化は岩脇他(2007)では横断的方法を用いて行われている。しかし看護学生個々のより具体的な変化を把握するためには、縦断的方法を用いる必要があるが、そのような研究は見当たらない。

## 2. 研究の目的

本研究の最終目的はコミュニケーション教育プログラムの開発だが、研究期間内では(1)看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴を明らかにすること、(2)看護学

生のコミュニケーション・スキルの変化を明らかにすることが目的である。

## 3. 研究の方法

本研究は看護大学2年生248名と他大学2年生50名、中堅看護師100名を被調査者とした。

調査期間は2014年12月から2017年2月であった。

本研究ではコミュニケーション・スキルを包括し定義づけた ENDCOREs 尺度と大学生の友人関係の特徴として対人過敏性(「傷つけ回避」、「距離確保」、「礼儀」、「傷つけられ回避」)をあげた岡田(2012)の友人関係尺度の視点をを用いた。ENDCOREs 尺度と友人関係尺度の使用を作者の了承を得た上、無記名自記式質問紙調査を臨地実習後に実施した。また無作為抽出した学生に3年次と4年次の臨地実習後グループインタビューを実施した(11回のべ83名)。

研究実施にあたり本学倫理委員会の承認を得た(看大第771号)。

## 4. 研究成果

(1)看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴を明らかにするため、質問紙調査に回答を得た看護大学生185名、他大学生41名、中堅看護師69名を分析対象とした。

看護学生群、他大学生群、看護師群との間で ENDCOREs 尺度の下位スキル(自己統制、表現力、解読力、自己主張、他者受容、関係調整)について分散分析を用いて比較したが、いずれの下位スキルにおいても有意差は認められなかった。

ENDCOREs 尺度の各上位カテゴリー(表出系、反応系、管理系)と友人関係尺度の下位尺度と相関を各群で求めた(表1)。

表1に示すとおり、看護学生群に特徴的な有意な相関は「傷つけ回避」と反応系および管理系カテゴリーであった。他大学生群に特徴的な有意な負の相関は「傷つけられ回避」

と「距離確保」と表出系カテゴリーであった。看護師群は「傷つけ回避」と管理系との間で有意だが弱い相関、また「距離確保」と反応系との間で有意だが負の弱い相関を認めた。

3群いずれも有意な相関が認められたのは「礼儀」と反応系と管理系のカテゴリーであった。

表1 ENDCOREs 尺度の上位カテゴリーと友人関係尺度の下位尺度との有意な相関

カテゴリー	傷つけられ回避	距離確保	礼儀	傷つけ回避
<b>表出系</b>				
看護学生				
看護師				
他大学生	-.393*	-.379*		
<b>反応系</b>				
看護学生			.500**	.347**
看護師		-.303*	.389**	
他大学生			.460**	
<b>管理系</b>				
看護学生	.179*		.509**	.445**
看護師			.254*	.269*
他大学生			.521**	

\*:  $p < .05$ , \*\*:  $p < .01$

以上のように本研究結果、看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴は、質問紙調査という自己評価では他大学生や中堅看護師との間で違いは見られなかった。しかしコミュニケーション・スキルを友人関係のあり方に照らし合わせて見ると、違いが明らかになった。すなわち看護学生の「相手を傷つけ

たくない」という気持ちが「相手の考えや気持ちを正しく読み取る」「相手を受け入れる」というコミュニケーション・スキルと関係していた。中堅看護師との比較からはこの特徴が看護師としての臨床経験を経て徐々に緩和されていくのではないかと示唆された。

(2) 質問紙調査データは3年間継続して研究協力を得た看護学生101名のものを対象に1要因の分散分析(反復測定)を用いて分析した。

看護学生の友人関係は4つの下位尺度(「傷つけ回避」、「距離確保」、「礼儀」、「傷つけられ回避」)いずれにおいても3年間で有意な変化を示すものはなかった。

看護学生のコミュニケーション・スキルについて、ENDCOREs 尺度の6つの下位スキル(自己統制、表現力、解読力、自己主張、他者受容、関係調整)ごとに比較した。表現力と解読力においては5%水準、自己主張では1%水準の有意な変化が3年間で認められた。解読力と自己主張においては2年次と4年次の間に5%水準の有意差が見られた。自己統制、他者受容、関係調整では有意差は見られなかった(表2)。

グループインタビュー後、逐語録を作り質的統合法を用いて分析した。その結果、3年次と4年次の臨地実習終了後に実施したグループインタビューでは、「2年の実習ではバイトルを測るので精一杯だった」「3年の時はゆとりをもってコミュニケーションできた」という言葉で表されるように多くの学生がコミュニケーションの変化を実感していた。また「すごく丁寧に相手の言いたいことを引き出して、こういうコミュニケーションがとれるようになったらいいなと思った」「あんな言い回ししたらいいんだとか他人を見て学ぶことが地域では多かった」というように看護師や保健師、他の学生のコミュニケーション場面を目の当たりにすることでモデリング学習が行われていた。また

「ネガティブな発言に対する返答が、経験を積まないとまだまだ返せない」と自己表現に戸惑いを感じていた学生も見られた。

表2 ENDCOREs 尺度の各下位スキルの3年間の変化

	2年次	3年次	4年次	有意差
自己統制	18.34 (3.60)	18.54 (3.40)	18.83 (3.45)	ns
表現力	15.78 (4.43)	15.92 (4.04)	16.68 (3.99)	*
解読力	18.28 (3.43)	18.52 (3.59)	19.16 (3.01)	*
自己主張	14.70 (4.07)	14.99 (3.76)	15.67 (3.78)	**
他者受容	20.01 (3.46)	20.35 (3.34)	20.59 (3.51)	ns
関係調整	18.60 (3.71)	18.68 (3.41)	19.02 (3.62)	ns

\* :  $p < .05$ , \*\* :  $p < .01$

以上のように本研究結果、看護学生のコミュニケーション・スキルが、臨地実習場面への慣れや他者の振る舞いを見る経験を通じて変化していることを量的にも質的にも確認できた。しかし特定の場面では自己表現に戸惑いを感じる学生も見られた。

2つの研究目的にそって研究成果を示した。看護学生の反応系（解読力、他者受容）と管理系（自己統制、関係調整）のコミュニケーション・スキルが、看護学生の「相手を傷つけない」という友人関係のあり方と関係していることがわが国で初めて明らかとなった。また看護学生のコミュニケーション・スキルが臨地実習を経て3つの下位スキルで明らかに変化していることが明らかとなった。しかしグループインタビューでは特定の場面では自己表現に戸惑いを感じる学

生もあった。

これらの結果を考慮すると、今後は自己表現場面を中心とした学生のモデルとなるようなコミュニケーション場面を作成することで、看護学生のコミュニケーション教育に資する教育プログラム開発が必要であると考える。

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計2件)

1. 武山雅志・岩脇陽子・北岡和代・室田昌子・丸岡直子、友人関係から見た看護学生のコミュニケーションスキルの特徴、第36回日本看護科学学会学術集会、2016.12.10、東京国際フォーラム（東京都・千代田区）
2. 武山雅志、看護学生のコミュニケーションスキルの特徴 - 看護学生と他大学学生の比較 -、日本パーソナリティ心理学会第24回大会、2015.8.21、北海道教育大学札幌校（北海道・札幌市）

〔その他〕

<http://www.ishikawa-nu.ac.jp/lab/takeyama/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

武山 雅志 (Masashi TAKEYAMA)・石川県立看護大学・看護学部・教授  
研究者番号：50381695

### (2) 研究分担者

1. 岩脇 陽子 (Youko IWAWAKI)・京都府立医科大学・医学部・教授  
研究者番号：80259431
2. 北岡 和代 (Kazuyo KITAOKA)・金沢大学・保健学系・教授  
研究者番号：60326080

### (3) 連携研究者

1. 丸岡 直子 (Naoko MARUOKA)・石川県立看護大学・看護学部・教授  
研究者番号：10336597
2. 塩谷 亨 (Toru SHIOTANI)・金沢工業大学・教授  
研究者番号：20278097